

Title	11 : 東京歯科大学歯科医師臨床研修修了後の研修歯科医の進路および進路志向
Author(s)	高橋, 俊之; 古澤, 成博; 片倉, 朗; 杉戸, 博記; 平田, 創一郎; 石井, 拓男; 亀山, 敦史
Journal	歯科学報, 113(4): 428-428
URL	http://hdl.handle.net/10130/3178
Right	

No.11: 東京歯科大学歯科医師臨床研修修了後の研修歯科医の進路および進路志向

高橋俊之¹⁾, 古澤成博²⁾, 片倉 朗³⁾, 杉戸博記⁴⁾, 平田創一郎⁵⁾, 石井拓男⁵⁾, 亀山敦史¹⁾
 (東歯大・千病・総合診)¹⁾ (東歯大・保存)²⁾ (東歯大・オーラルメディスン口外)³⁾
 (東歯大・口健・保存)⁴⁾ (東歯大・社会歯)⁵⁾

目的: 東京歯科大学においては、千葉病院・水道橋病院・市川総合病院の3病院においてそれぞれ独自のプログラムを設け研修を行っている。既に著者らは臨床研修歯科医の診療状況、初期研修改善への取組、協力型臨床研修施設、専門研修や群内マッチングについては報告している。今回は、平成18年度からの歯科医師臨床研修必修化以降の東京歯科大学における臨床研修修了後の研修歯科医の動向、特に臨床研修修了後の進路および進路志向について検討したので報告する。

方法: 東京歯科大学は千葉病院・水道橋病院・市川総合病院の3つの臨床研修施設を有しており、平成18年度の歯科医師臨床研修必修義務化以来、平成23年度まで総数698名の臨床研修歯科医の研修を修了してきた。現在千葉病院は4つのプログラム、水道橋病院は2つのプログラム、市川総合病院は1つのプログラム、合計7つのプログラムを運用している。今回これらのプログラムに関して臨床研修必修化以降の記録資料を基に、平成18年度から23年度に在籍した研修歯科医の臨床研修修了後の進路および進路志向について集計および分析を行った。

結果および考察: 1) 臨床研修修了後の進路

全体としては開業医勤務が最も多く34%を占め、次いで千葉大学院20%、千葉臨床専門専修科生16%、他大学7%の順であった。

2) 臨床研修修了後の研修歯科医の進路志向

千葉病院では大学院、レジデント等、開業医の3グループをそれぞれほぼ同数の研修歯科医が選択しているのに対し、水道橋病院ではレジデント等、開業医がほぼ同数で、大学院が少なく開業医臨床志向が強い傾向が認められた。市川総合病院ではほとんどの者が大学院、レジデント等に進み、専門分野学習志向が強いことが認められた。千葉病院、水道橋病院、市川総合病院の間の進路分布には、Fisherの正確確率検定において統計学的な有意差を認めた。また臨床研修を修了した本学学生と他大学学生の本学大学院、レジデント、臨床専門専修科に進んだ者について分析すると、研修修了後の在籍率には大きな違いはなく、本学大学院への進学率にも相違はないが、他大学学生はレジデントが多く、臨床専門専修科が少ない傾向であった。

No.12: 東京歯科大学顎顔面補綴外来における開設後2年間の初診患者の実態調査

萩尾美樹¹⁾, 石崎 憲¹⁾³⁾, 田坂彰規¹⁾, 野本俊太郎²⁾, 大神浩一郎¹⁾, 佐藤一道³⁾, 山内智博³⁾,
 野村武史³⁾⁵⁾, 片倉 朗³⁾⁴⁾, 柴原孝彦⁵⁾, 高野伸夫³⁾, 櫻井 薫¹⁾ (東歯大・有床義歯補綴)¹⁾
 (東歯大・クラウンブリッジ補綴)²⁾ (東歯大・口腔がんセンター)³⁾
 (東歯大・オーラルメディスン口外)⁴⁾ (東歯大・口外)⁵⁾

目的: 2011年10月に東京歯科大学千葉病院に歯科専門外来の一つとして顎顔面補綴外来が設立され、同時に市川総合病院口腔がんセンター内においても顎顔面補綴治療が開始された。現在の2施設における開設後2年間の初診患者の実態調査を検討し、今後の受診状況の推移を予測することは、外来の在り方、方向性を決めるうえで必要不可欠である。そこで今回上記患者の臨床的統計を行ったので報告する。

方法: 対象は2011年10月から2013年8月までの約2年間に顎顔面補綴治療を目的として2施設を受診した患者を対象に初診患者数、男女比、初診時年齢分布、疾患別割合、欠損部位、紹介元医療施設について検討した。

結果: 千葉病院顎顔面補綴外来における総受診患者数120人のうち初診患者数は41人(男性22人、女性19人)であり、初診時年齢は25~88歳で70歳代にピークが見られた。疾患別割合は下顎歯肉癌が20%と最も多く、ついで上顎歯肉癌、唇顎口蓋裂、舌癌、エナメル上皮腫で、欠損部位は上顎(上顎骨、口蓋骨)26症例、下顎骨10症例、舌3症例、口底1症例、頬粘膜1症例であった。全症例の60%が院内

口腔外科からの紹介であった。市川総合病院口腔がんセンターにおける顎顔面補綴治療受診患者数は58人(男性31人、女性27人)であり、初診時年齢は43~89歳で60歳代にピークがみられた。疾患別割合は上顎歯肉癌が31%と最も多く、ついで下顎歯肉癌、口底癌、舌癌で、欠損部位は上顎(上顎骨、口蓋骨)20症例、下顎骨18症例、舌7症例、口底7症例、頬粘膜5症例であった。全症例の93%が口腔がんセンターの患者で、そのうち7%が術前紹介であった。

考察: 東京歯科大学2施設における手術症例は舌癌が最も多く、本調査の受診原因疾患の結果と相違がみられた。これは、舌癌には術後の補綴治療の必要性が低い症例があること、また、術後の紹介先として摂食嚥下リハビリテーション科の存在が影響しているものと思われる。千葉病院において、最近2年間の院内口腔外科からの術前紹介率がそれ以前と比較して増加しているのは顎補綴担当医の術前カンファレンスへの参加などにより院内連携が進んだ結果と考えられる。今後はさらに近隣施設との連携を強化し、より多くの顎顔面欠損患者の早期の機能回復に寄与できるよう体制を整えていく予定である。